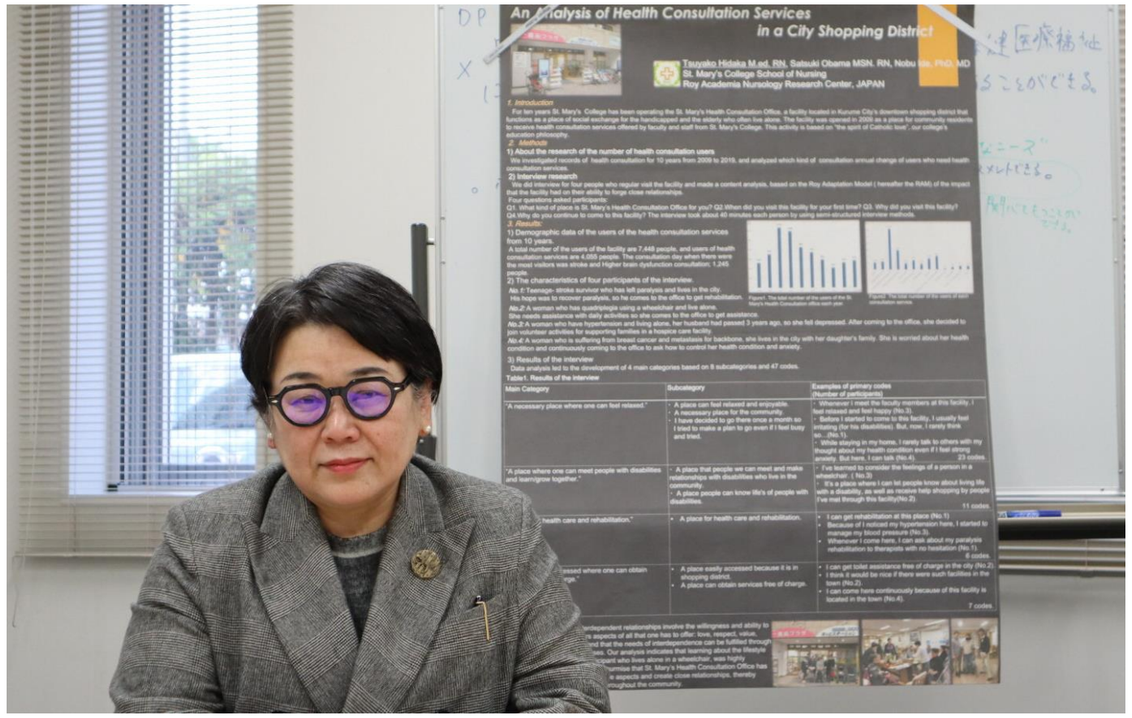

ケアリング文化が根づく地域を目指して

聖マリア学院大学看護学部長/大学院看護学研究科教授/
地域・国際連携センターセンター長
日高　艶子
HIDAKA　Tsuyako

経歴
鳥取大学医学部保健学科、同大学院医学系研究科保健学専攻看護学分野にて教育・研究に従事後、平成18年より聖マリア学院大学看護学部に着任、令和2年より現職。

先生がセンター長を務められている地域・国際連携センターではどのような活動をされているんでしょうか。

聖マリア学院大学はカトリック大学としての看護大学であり、地域ファーストをミッションに掲げています。**地域で暮らす皆様が心身共に健康に生活できることを願って、教職員と学生が一丸となり積極的に地域に出向き活動**しています。活動は、近隣の地域に限らず、開発途上国の人々をも対象にグローバルに行っています。

具体的な活動内容について教えてください。

地域における活動の一つに、久留米市鳥飼校区の津福東公民館で地域のボランティアの皆さんによって運営されている「いきいきサロンふれんど」への参加があります。この活動は、高齢者が笑顔で暮らす地域を創ることを目的に開始されたとのことです。

本学の教職員と学生は平成31年度から活動に参加させて頂き、サロンの利用者の方とボランティアの皆さんの健康観察やボランティアの皆さんが企画されている活動に利用者の方と一緒に参加し交流を図っています。

今までどれくらいの方が参加されていらっしゃるんですか。

「いきいきサロンふれんど」は毎月1回行われています。私どもが参加した平成31年1月～令和2年2月までの参加者数は、延べ六百五十人を超えていました。これはすばらしいことだと思います。

コロナ以前は、毎年海外から10～20人程度を12日間受け入れていました。

研修を通じての気づいた点などはありますか。

研修員の多くは、母子手帳に驚かれますね。開発途上国では治安や女性の社会的地位、妊婦を取り巻く環境が依然として劣悪であることから、母子の健康管理という政策分野において、未だ不十分な状況があるようです。また、本学の学生も国際交流の機会を得ることが出来ますし、他国やその歴史についての理解が深まっているようです。

最後に、久留米のお好きなところは。

久留米の好きなところは、通りをちょっと入ると個性的な店や人に遭遇するところです。

とにかく出会った人々にパッションがあります。

運営されているボランティアの皆さんの情熱と継続する力によるものだと思います。聖マリア学院大学からの参加者数は、延べ二百人弱でした。

高齢者の方は、学生と触れ合う機会もあり喜ばれるでしょうね。

そうですね。ボランティアのリーダーの方から「利用者の皆様が学生に会うことを楽しみにされ、表情が豊かになり装いも明るくなられた」とお聞きしています。もちろん、学生も楽しそうに活動しています。お互いに良い刺激になっていると思います。

学生さんたちにとっても、良い経験になりますね。

サロンへの参加は、鳥飼校区まちづくり協議会と事業連携協定を結んだことがきっかけとなっています。私どもは、看護学の専門的な知識を生かして何か地域に貢献したい、学生を地域の皆様に育てて頂きたいという思いがありました。ボランティア活動を通して、地域の皆様と、共にケアリング実践者としての学生を育成できる機会になるのではないかと考えました。学生は利用者の皆様との対話を通して高齢者の理解を深めています。

ケアリングとはどういったものでしょうか。

ケアリングとは人間の本質的な在り方です。他者へ関心を寄せ気遣うこと、ケアすること、そしてお互いに成長していく関係を言います。学生はサロンで利用者の方のケアをしますが、学生もまた利用者の方との交流を通して癒されます。

これは利用者の方たちからケアされているのです。ボランティアの方との関係も同様です。**お互いにケアしたりケアされたりする関係、感謝したり感謝されたりする関係、そして成長していく関係、このような関係がケアリングの関係**といえます。

学生さんからはどういった感想が出ていますか。

学生はこの活動を通して、地域の人々が自分たちの地域で暮らす高齢者の皆さんに関心を持ち地域で支えていること、ボランティアの方も高齢者の皆さんに支えられていること、つまり、ケアリングの文化が根づいていると感じたと話していました。

先生たちから見ても効果を実感されますか。

サロンでの学生の経験は、学生の人格と看護実践者としての成熟に繋がっています。学生は、地域で暮らす人々と交流し、高齢社会の中で如何にして人々が支え合って暮らしているのか、健康な地域はいかにして創造されるのかについて学修しています。ボランティア活動を通して、地域の皆さんに育てて頂いていることに感謝しています。

先生はこういった活動が多くの地域で実践され、それぞれが生活する地域で、ケアリング文化を創ることができればと考えてありますが、私たちも実践者の一人になれるんでしょうか。

もちろんです。先ほどもお話ししましたようにケアリングは人間の本質的な在り方です。親と子の関係、教師と学生の関係、家族の中でケアする人とケアされる人の関係など様々な関係において、お互いに感謝し、お互いの成長を促す関係。サロンのボランティアの方と利用者の方との関係も同じです。**私たちは誰かをケアすることでそこに自分の居場所を見つけます。また、ケアされ癒された人は他の誰かをケアします。このサイクルが地域のケアリング文化を創造し、地域の成熟に繋がる**のだと思います。

聖マリア学院大学では地域での活動に限らず、母子保健分野で国際貢献もされていらっしゃると伺いました。

平成27年以降JICA（ジャイカ：独立行政法人国際協力機構）との委託契約により、開発途上国の医師や助産師等を研修員として受入れ、母子保健事業の研修プログラムとして企画・運営しています。

日本の母子保健医療に関する制度や基本的な知識を学び、自国の現状と比較・検証して自国で取り組むべき課題を理解してもらうということを目的としています。

脳梗塞を患った患者さんが、その体験をサロンでお話しされたことも。ケアを受ける側と思われる方が、体験を話したり特技を披露されることで、他者をケアする側になり得ることを熱くお話しいただきました。

【インタビュー後記】
病院と地域、健康な方と病気を患った方。それはケアをする側とケアされる側という一方的な立場にではなく、それぞれの立場でお互いをケアする人になり得るということは、私の「気づき」になりました。新型コロナウイルス感染症で直接触れあう機会も減っている時代だからこそ、思いやりの気持ちをもって過ごしたいと思います。